

に圓形瀰蔓性濁濁あり角膜周擁充血、虹彩炎、プレチビタート」著膿を認めず細隙燈顯微鏡にては角膜濁濁部に相當して上皮細胞の浮腫ありワ氏「ピルケ」反應は陰性吉田氏反應は陽性治療として前房穿刺自家血清の球結膜注射△の注射「アトロピン」點眼爾來徐々に快復は十五日にして視力〇・九となり角膜濁濁も認めずよつて圓板狀深部角膜炎なる名稱を適當なりとす。

次に深部角膜の浸潤を來す疾患を列記し圓板狀角膜炎の定義を検討して著者の症例につき考察せり。

#### 中村文平 (大阪)

所謂後水晶體腔に就て。糖尿病に罹患せる五十四歳の男子が化膿性膝關節炎及び出血性虹彩毛樣體炎を起し次で硝子體膿瘍を惹起せる患者の經過中に於て後水晶體腔出血と見るべき症狀を呈せり而して其位置形狀吸收の有様頭部の位置を變する事により血液の下部へ流動する點等よりして本例に於ては水晶體の後方に一つの空洞あり之れに出血瀦溜したる事は疑ひなし然れども本例は一方に於て出血性虹彩毛樣體炎及硝子體膿瘍あれば之れを以て生理學的或は健常の状態に於ける後水晶體腔を推定する能はざれども斯くの如き場合には水晶體の直後に後水晶體腔を生ずる事ありと云ふを得べし。

#### 筒井徳光。河原省平 (岡山醫大眼科)

神經衰弱を伴ふ先天性全色盲の一例に就て。二十三歳の男子先天性全色盲にて弱視羞明眼球震盪近視あり自ら全色盲あるを知らず職業上の困難多きにも拘らず無理に不適應に従事し遂に強度の神經衰弱となる尙兩親は從兄妹結婚なるも他に遺傳的關係を證明せず「アノマロスコープ」第二型による近藤氏検査法を行ひ  $a_1 + (31a) K II can$  なる式を得た從て先天性全色盲に於ては波長を異にする光線の明度累加はその混合要素の算術和として現はれる事を知る「アノマロスコープ」第一型による検査に於ては小口氏の所謂蟻螂形をなす廣い均等面は認めなかつたが之を極度に細くした如き帶及線を同じ位置及び方向に認めた。其混合振子七三以下に於ける成績は近藤氏等の成績と殆ど一致した。

#### 佐野多郎 (京都府立醫大)

麻痺性角膜炎の成立機轉に關する病理組織學的考察。麻痺性角膜炎の原因は種々あれど三叉神經の知覺傳導中絶殊に第一枝麻痺を來すが如きはその原因となり得る然れどもこれが臨牀上實驗的に幾多の學說ありその成因に就ては今尙確たるものなし然るに著者は三叉神經の頭蓋内切斷したる後種々の時日を経過したる家兎の眼球を得之を臨牀的及組織的に検査